
淫行教師と純情と

みくも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

淫行教師と純情と

【Nコード】

N7312T

【作者名】

みくも

【あらすじ】

私は元宮奏が嫌いだった。教師のくせに軽薄で、生徒にまで手を出しかねない男だからだ。

私は、元宮奏もとみや そうが嫌いだ。

教師のくせにと、いつも思う。

外見からしてちゃらちゃらしていて、校内の誰よりも茶色い頭はよく目立つ。

女と見ればだれかれ構わず口説くようなまねをして、それでもクビにならないのだから信じられない。だって、最低の男だ。元宮は生徒にも声をかけるのに。

元宮は、見た目がいい。それに、調子もいい。だから話しやすいのか、いつも人に囲まれている。

どうしてみんな、騙されるんだろう。

周囲にいるのは女子生徒がほとんどだけど、男子もいないわけじゃない。それが理解できなくて、一度、男友達を責めるように問いつめた。

——だって、元宮は嘘をつかないじゃないか。

それが彼の返答だ。確かに、そうかも知れない。でも逆に言えば、欲望に正直過ぎるって事なんじゃないの？

短いスカートを頼りなげにひらめかせ、好意と好奇心いっぱい教師を取り囲む女子生徒たち。そのまん中でへらへら笑う男を見るたびに、いらつくような、不安なような気分になる。

やっぱり、嫌い。

「月島つきしまはさ、イイ子だねえ」

私から袋いっぱいの玉ねぎを受け取って、しみじみ言うのは元宮だ。

うさん臭い、と思う。それが顔に出ていたようだ。私の背丈よりずっと高い位置にある顔が、クシヤリと崩れてげらげらと笑い出す。面白くてしょうがない、と言う様子が、こっちの神経を逆なでした。

「もういいですね。失礼します」

「ゴメン、ゴメン。手伝ってくれてありがとう」

ますますひねくれた私の内心を察してか、とりなすように教師は言った。だけど、そんな所も気にいらぬ。

「別に。頼まれたから、手伝っただけです」

「聞いてくれると思わなかつたんだよ。オレの頼みはね」

驚いた。思わず、元宮の顔をじつと見つめてしまう。

不運にも、お互いに一人だった。私は部室に忘れ物を取りに戻るところで、元宮は車から荷物を降ろそうとしていた。

職員用の駐車場と、プレハブの部室棟だけがある校舎裏だ。部活も終わったこの時刻では、通りかかる人間もない。

何てタイミングが悪いんだろう。

その考えが反射的に思い浮かんで、浮んだ時には元宮が私に向かって手招きしていた。

悪いけど、運ぶの手伝ってくれる？　そう言って示した車内には、スーパーの袋やダンボールいっぱい食材が積まれていた。元宮は調理部の顧問だったつけ、と。その時になって思い当たる。

いつもなら部員か、その辺にいる生徒に手伝ってもらっただけ。そんな言いわけめいた言葉を聞かされながら、車と調理実習室を何回も往復した。

ずり落ちる袋を抱え直し、足を動かしながら私は密かに納得していた。元宮は大抵、生徒に囲まれている。その平均人数は二、三人から十人足らず。それだけの労力があれば、こんな作業はあつと言う間に終わるだろう。

ならばなぜ、いつもいるはずの彼女、彼らは今ここにいないのか？

その疑問に答える私の中の最有力説は、この状況を見越して全員逃げた、と言うものだ。だとしたら、見習いたい。要領がよ過ぎる。そんな事を考えていたせいだろうか。嫌々手伝っていたのが、わかっていたらしい。

運んだ食材は、シンク付きの大きな机に積まれている。元宮はそ

の机の下から引き出した椅子に座り、にっこりと笑う。うさん臭さ
倍増だ。

「頼まれたら、手伝うのは生徒として当然だと思いますけど」

「だから、お礼を言ってるんだよ。オレを嫌ってるのに、教師っ
ただけでお願いを聞いてくれてありがとう」

「嫌ってません」

一応、嘘をついてみた。

よしあしはともかく、元宮は普通の教師じゃない。普通より、生
徒から大人気。不本意な嘘もつきたくなる。にらまれたら、校内の
居心地は最悪だろう。

それに、私も子供じゃない。教師を相手にまともにやりあえると
は、思っていない。……まあ、嫌悪を顔に出しちゃうくらいは、子
供だって事なんだろうけど。

「イイんじゃない？ 嫌いなら、嫌いで」

「え？」

「嫌なら嫌、嫌いなら嫌い。正直に言って、何が悪い？ 月島がそ
う感じるには、相応の理由があるんだろ？」

うん。淫行教師のどこを好きになればいいのか、私にはさっぱり
わからない。

でも、本人から肯定されるとは思わなかった。何を考えているん
だろう。

この人が、いよいよわからなくなった。途方に暮れるのと似た気
持ちで、その姿をただ見つめる。

調理室は、うす暗くなり始めていた。電気をつけていないから、
太陽が沈む速度で闇が深まる。

「なのに、二人っきりになっちゃうんだよな。オレが、先生だって
だけの理由で」

顔が見えない。

窓を背にした男の影が、ぞっとするほど恐かった。

「……失礼します」

どうにか挨拶を口にして、調理室を飛び出した。追ってきた「気を付けて」の声だけを、背中 で 聞いた。

「そんなこと言ったのか？ 元宮先生が？」

驚いた顔で聞き返すのは、数少ない男友達の浜木^{はまき}だった。

調理室から飛び出して、校門に向かつて走っている所を呼び止められた。猛スピードで走る私が余りに必死だったので、何事かと思ったらしい。

俺は委員会で遅くなったんだ。月島は？ 部活にしても、ちょっと遅いよな。駅まで一緒に帰ろうか。言いたくないならいいけど、何かあった？ —— こんなふう^{ふう}に、浜木は私に話しかけた。押し付けないよう、注意を払っているのがよくわかる。

聞き上手って、きつとこう言う事だ。思えば以前、元宮のどこがいいのかと問いつめた相手も彼だった。自分だってまだ混乱してぐちゃぐちゃなのに、相談できたのは浜木が相手だったからだと思う。話している内に、ざわざわとした心が少しずつ落ち着いて行く。

このタイミングで会えた事に、私はそつと感謝した。

「でも、らしくないな。元宮先生って人当たり良いから、脅かす様なこととか言わないと思ってたけど」

「だって、言われたもん」

厳密には、脅かされたわけじゃない。でも、あの状況ではそれに等しい。少なくとも受け取る側には、そうとしか聞こえなかった。

浜木は「ふうん」と呟いて、歩きながら空を見上げる。次にうつむき、指先で頭を搔いて「でもさ」と言った。

「解るよ。月島に、そう言いたくなる気持ち」

「何が！」

大きな声になった。

慌てて周囲をうかがうが、人影はない。この時間、駅に続く大通りに出れば車や人の交通量は多い。でもここは脇道みたいなもので、ごくたまに人と擦れ違ってくるくらいだ。

夕闇の中、街灯の光に落ちる影を足元に見付けた。私の心は今、

きつとこの影みたいになつ黒な色をしているんだろう。

男ってみんな、同じなのか。浜木もしょせん、元宮側の人間って事か。

ショックで固まった私に、浜木はしかし落ち着き払って言葉を続ける。

「月島が俺を信用するのは、クラスメートだから？ それとも、風紀委員だから？」

「そんなの……浜木だからだよ」
ほかに、答えようがない。

「光栄だけだね。だったら、もしも今から俺が月島にキスするとしたら、どうする？」

「逃げる」

「うん、まあ良いけど。即答やめて。さすがに俺も切なくなる」

「だって、あり得ない」

「なくはないよ。力尽くでなら多分、できちゃうと思うんだ」

困惑した。そう言う浜木の様子が、何ともあっけらかんとしていたために。

女相手に力尽くと言ったら、物騒な話に決まってる。なのに浜木が言つと、どうもそんなふうに聞こえない。

眉を歪めて、その顔を見る。

「恐いなあ。だけど、男と二人つきりつて、多かれ少なかれそういうことだよ。でも月島は、この可能性をチラツとも考えないだろ？
それがさ、危なっかしい気がするんだよ」

「何がよ」

「そりゃ、心配するよ。先生ってだけで、信用してない相手に付いてつちやうんだから。肩書きだけじゃどんな人間か解らないって、月島は知ってるのかと思つてた」

痛い所を突かれ、返す言葉もない。確かに、その通り。

私は元宮を信用してない。そのつもりだった。

だったら何で、私は元宮を手伝ったんだろう。ほかに誰もいな

い、二人っきりの状況で。先生は先生だって、頭のどこかで高をくくっていた気がする。そんなの、何の根拠にもならないのに。

「今日のは、元宮先生からの注意喚起ってことだと思うよ。けどどうしても嫌なら、近付かなきゃ良い。それでも我慢できないことがあったら、また俺に相談してよ。これどう？」

「……わかった」

これで解決。悩むのはおしまい。

近付かなきゃいいだけなんて、実に簡単な話じゃないか。

だけど、胸の中にもややとしたものが残ってる。

その理屈は結果として、元宮を擁護した形だ。もともと元宮に好意的ではあったけど、ただ好きだからって理由だけではかばわない。浜木はそう言う人間だ。

なら、理由があるはずだ。そう考えて、さらに面白くなかった。理由があるとしたら、元宮が正しいって事以外、思い浮かばない。でもそれじゃまるで、あいつがいい先生みたいじゃないか？

納得行かない。

以降数日、これが私の口ぐせになった。

「だっていつつもへらへらしてるし、化学教師なのに調理部の顧問って女ウケ狙ってそうだし、髪も服も顔もチャラいし、変な事言うし、もうわかんない！ 何考えてんのか、ちゃんと試みてよ！」

「落ち着け月島！」

わめきながら調理実習室に飛び込んだ私を止めたのは、当然と言うべきか、元宮だ。しかし実習室の中は先日と違い、部員らしい生徒でいっぱいだった。それらの視線を一齐に受けて、やっと部活中なんだと気が付いた。

急激に顔が熱くなる。しまった。事前に確かめて置けばよかった。で、オレを批判する以外に、何か用？」

「いえ、ちよつと……」

先日のあれはどう言っつもりだったのか、確かめたかったただけだ。浜木の言う事を信じればいい気もするし、そうではないって気も

してくる。考えれば考えるほどわからなくなつて、罵倒まじりに本人を問いつめようと決意した。

ついでに言うつと、予定としてはこんなに大量の目撃者を作るつもりはなかった。

「まあ、もうすぐ終るから。ちょっと待つてて」

隅に椅子を引き出して、座つて待つように言い置くと元宮は部員の指導へと戻つて行つた。

あれ？　と思う。落ち着いて見れば、部員の約半数は男子生徒だ。意外と言うのが正しいかどうか知らないが、素直に驚く。見渡す限りの女子生徒に囲まれて、ハーレムみたいな部活動がくり広げられているとばかり思つてたのに。

男子が多い事にも興味を引かれたが、これだけの人間が一斉に料理をしている光景はなかなか面白い。

首を伸ばして調理の様子を見てみると、元宮のぼそぼそとした話し声が耳に入つた。

「なあ、オレつてそんなにヘラヘラしてる？」

気にしてたのか。

しばらくすると、目の前に小鉢が差し出された。

「肉じゃが……」

「食べてみて」

視線を上げると、すぐ近くで料理をしていた男子部員の顔があった。

「肉じゃが嫌い？」

「いえ、好きです。いただきます」

怒鳴り込んだ私に食べ物をくれるなんて、きっと功德のある人に違いない。心の中でそつと手を合わせ、ほくほくのジャガイモを口に含む。

「おいしい！」

「よかったー」

ほつと笑つ男子の横から、感心したように元宮がひよいと口を挟

んだ。

「美味しい料理で釣れるのは男だけかと思ってたけど、これじゃ月島も釣れそうだな」

悔しいけど否定しがたいので、黙っている事にする。

と、ほかの部員から声が上がった。

「せんせー、ホントに男の人って料理に弱いのか？」

「弱いぞー。男は単純だから、すぐ騙される」

「じゃあさ、男が料理できて得する事って？ 月島さんが釣れるだけ？」

「いや、料理上手な悪い女に騙されずに済む」

もぐもぐと口を動かしながら、どつと沸く実習室を不思議な気持ちで眺めた。本当に元宮と言う教師は、生徒から人気がある。その事を、初めて実感したような気がした。

あと片付けを少し手伝い、部員たちと一緒になって昇降口へ向かった。その途中、女子部員の一人に声をかけられる。

「月島さんて、料理しないでしょ」

「うん、まあ……」

どうしてわかるのかと考えながら言葉を濁すと、彼女はくすくす笑って私を見た。

「からかってるんじゃないの。料理をする人ならね、分かるんだって。正確に材料を準備して、正確な手順で加工すると、教科書通りの結果が得られる。だから料理と化学って、実は凄く似てる——って、元宮先生が言ってたんだけどね」

「ああ……さっきの」

化学教師が調理部の顧問なんて、と。私がわめき散らしたセリフが、引っかかっていたのかも知れない。部の事まで否定するつもりはなかったのに、悪い事をしてしまった。

一言謝るべきだろうかと彼女の顔を見ていると、ん？ と思う。何かを取りこぼしているような、そんな感覚が胸を満たす。

それが何かを思い出す前に、肉じゃがをくれた彼がのんびりと言

う。

「でも月島さん、いいの？ 帰っちゃって。先生に用だったんじゃない？」

……それだ。

忘れるくらいなら明日にしてもいい気がしたが、やはり気になる事は少しでも早く決着を付けたい。急いで調理実習室に引き返す。

まだいるか不安だったが、着いてみるとそこにいた。元宮だけでなく、元宮と女子生徒が、二人で。

「好きなんです」

その声が聞こえて、反射的に息を殺した。思わず屈んで机の陰に身を隠す。そうしてから、なぜそっと立ち去るデリカシーがないのかと自分を責めた。

彼女はまだ、私の存在に気付いていない。これはもう、最後まで自分の存在を隠し続けるしかない。そう判断し、目を閉じて耳を塞いだ。

こうなって知ったのは、耳を塞いでも結構聞こえると言う残念な事実だ。

元宮の声。

「で、君はどうしたい？」

「先生と、付き合いたいです」

「本気で？ オレと付き合うのは、覚悟が要るよ」

「本気です！ 覚悟ならあります。先生となら、どうなったっていい！」

「……どうなったって？」

少し置いて、元宮は吐息めいた笑いをこぼした。

「なら少し、どうなるか言ってみようかな。君がどう考えてるか知らないけど、オレは大人だから。プラトニックな付き合いは難しい。妊娠の事はどう考える？ 百パーセントの避妊はないからね。あまり寝覚めのイイものじゃないけど、君の年齢なら親御さんが中絶を勧めるかも知れない。決めるのは僕じゃないから、その事も考えて

置きなさい。それからもし出産するなら、将来は今の希望通りとは行かないだろうね。出産にはしばらく休学する必要があるし、子育てするなら進学は諦める事になるかも。それからオレはクビになつて、収入がなくなる。結婚したとしても、君と子供を養う自信ないなあ。それは再就職に望みを掛けるとして、オレは本当に君の王子様なのかな。妊娠を理由に結婚して、後でオレが酷い人間だつて気付いたら？ 学歴も社会経験も、仕事もないのに子供を抱えて離婚できる？ そしてそうなつて、何であの時つて後悔しない？ 覚悟つて言うのはさ、享樂的に突つ走るつて事じゃない。こう言う事全部、ずっと抱えて生きるつて事だよ」

これはひどい。

目も耳も塞ぐのを忘れて、呆然とその男の横顔を見た。どこの世界に、少女の恋をこんなにまで打ち砕く教師がいるだろう。

ここはほら、当たり障りなくさ。気持ち嬉しいけど……、とか言つて逃げとけばいいんじゃないの？

告白した女子生徒は、ぱたぱたと涙を落として部屋から駆け出し、てしまった。そりゃそうなるよ。好きな相手にあんなだけ言われりゃ、世界の果てまで逃げたいよ。

「ばか？」

物陰から顔を出すと同時に罵ると、元宮はびくりと震えて飛び上がった。がたがたと食器棚にぶつかつて、ようやく細めた目で私を見付ける。

「……月島？」

「ねえ、断るにしてもさ。もつとあるでしょ、何か。トラウマだよ？ あの子、トラウマになっちゃうよ？ 恋愛恐怖症だよ！ て言うか、女子高生の告白だよ？ 何で軽薄教師が断つてんの？ チャンスじゃないの？ 待つてましたとばかりにぐいぐい食い付く所じゃないの？ ねえ！」

「……覗きは趣味が悪いぞ」

反論はそれだけか。

やっぱり私は、納得行かない。

先日の一件からこちら、ずっと言いたかった言葉をぶつける事にしよう。静かに、目を見つめて。

「先生さ、何考えてんの？」

問いかける。

これに答えてくれないなら、私は元宮を永遠に信じることはできない。そんなつもりだった。

いつものへらへらは、今だけはどこかに引っ込んでいる。私の顔をじつと見て、それから手の平に隠れた唇で「うん」と小さく呟いた。誰かに聞かせるためじゃなく、決めた、とでも言うみたい。

「オレ、教師になるつもりなかったんだよ」

「ああ、向いてなさそうだもんね」

自覚があつたのかと同調すると、元宮は傷付いたようにこちらを見た。何だ。それが理由じゃないのか。

「じゃあ、何でなつたの？」

「就職難でさー」

へらりと笑う。シリアスは長続きしないらしい。

「まあ、向いてないのも事実だけど……。いや、だからかな。思ってたんだよ。教師になったら、オレの知ってる事全部、生徒に教えるって」

「全部？」

「全部。勉強だけじゃなくてね。大人はずるいつて事。大人は汚いつて事。信用できる大人は中々いなくて、教師だつて人間だつて事」

「先生。私ら人間不信にしたいの？」

思わず言つと、元宮は吹き出すようにして笑った。

「人間不信は困るかな。考えて欲しいんだよ。大人だからって理由じゃなくて、先生だからって事じゃなくて。自分の目で見て信じられるかどうか、判断できる様になって欲しい」

今まで喉に引っかかっていたものが、すとお腹の中に飲み込めた。

腑に落ちる、って。きっと、この感じだ。

しかし何て、わかりにくいんだろう。「オレは恨まれたっていいんだ」などとうそぶく横顔に、私は腕組みをして言葉を投げる。

「先生」

「ん？」

「ばか？」

重要な事なので、もう一度言って強調した。

*

翌日、私は職員室に元宮を訪ねた。

彼は前屈みに、自分の机を見つめている。そこにあるのは、入部届け。私が示した、調理部への入部希望と言う意思表示だ。

「……月島」

「はい」

「去年、陸上部の一年で一人だけ県大会に出たのって確か……」

「私ですね」

「マズイだろ！」

叫ぶと同時に暴れるから、元宮の座った椅子はぎいぎいと苦しげな音を立てる。そんなに興奮しなくても。

「陸上は好きでしたけど、料理への情熱がおさえ切れなくて退部しました」

「待て待て待て。昨日の感じだと、全く料理した事ないだろ月島」

「経験と熱意は関係ないと思います」

「何でわざわざオレの所に来るんだよ！」

明るい色の頭を抱えて、教師はわめく。

そりゃ、そう思うよね。

一応事前に相談した浜木は、「その展開は予想してなかった」と呆れ果てた。

元宮奏は、ちゃらちゃらしている。調子がよくて、見た目もよく

て、女と見ればだれかれ構わず口説くようなまねをする。

だけど。めちゃくちゃだけど。それはどこか誠実だった。

迂闊な私に、信用できない男と二人きりなるなど注意した。

向こう見ずな生徒の告白を、最悪な想定でたしなめた。

やり方は最低。だけどこれってさ、ほんと、私たちに必要な事だ
って思うよ。

「先生さ、ほんとばかだよな」

「あ？」

ぐしゃぐしゃの頭もそのままに、元宮は椅子の上から私を見る。

「あんなふうに大事にされてさ。私が先生を好きになっちゃうって、
思わなかったの？」

この言葉のせいだろう。こちらを見上げるその顔が、泣きそうな
くらい情けなく崩れた。私はそれに、胸いっぱい幸せを感じる。

軽薄淫行教師に初めて勝ったと、心の中でほくそ笑んだ。

(了/Copyright(C) 2011 mikumo・A
ll rights reserved.)

（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

どうもすみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7312t/>

淫行教師と純情と

2011年6月6日12時40分発行